

# アーバン・グリーンの すすめ

文：進士五十八(東京農業大学教授)

## 野生の思考 緑水土農あつての人間生存

昔のひとは、自分たちの生活に役立つ動植物に名前をつけた。根っこが薬になるもの、葉っぱが発酵して染料になるもの、実が食べられるもの、切り傷を治すもの、下痢に、便秘にとか、灯明に松明とか、何ごとにも天然自然資源に頼るしかない。必要な資源を大自然から見つけ出し、生きてゆくために手元に集め、飼育、栽培する。野生の鶏を飼育して、卵や肉をとるために改良したのがニワトリ。植木の場合はニワキ。ニワとは人間の生活の場。家畜化されたときに名前にニワがつくのである。

いまでは世界共通の国際命名規約で、すべての生き物には「学名」が与えられているが、昔は有用植物にだけ名前があった。その国、その地方、その集落独自の呼び名である。子どもたちに正確に伝承しなければならぬ「生きる知恵」であった。当然、根と実の両方が有用であれば、その植物は2つの名前があったし、何の役にも立たない植物は名前もなかった。

日本人にいちばん大切なイネの生育を邪魔する植物は「雑草」といわれた。『ファール昆虫記』は日本ではよく読まれるが、生国のフランスではそうでもないらしい。肉食の国では、牛、馬、羊など有用な家畜ではない昆虫などは関心の外であったのだろう。

科学の目以前のこうした『野生の思考』(クロード・レヴィ＝ストロース著)はいまや忘れられているが、人間の本能を刺激するような「自然とのふれあい」の原形がここにあることを思い出さなければならない。

たとえ大都会で暮らすひとたちでも、果物のなっている風景、稲穂の穂る風景に、なぜか懐かしさを感じ、癒される。人々のなかの野生性が呼び起こされるからだろう。

## 緑の量 グリーン・ミニмум50%

20世紀は科学技術文明がすすみ、農村は都市化されていった。近代化である。近代では何ごとにも機能的か合理的かで判断され、効率性が重んじられる。その結果、便利で快適で、経済大国になった。そんな都市では、道路に葉が落ちて汚い、市街地のなかに農地があつては土ぼこりが舞う、隣家の庭木が目障りだ……と苦情をいうひとが増える。整然と区画された公園や花壇しか「都市の緑」ではないと思うひとが増える。高度経済成長に酔いしれた多くの日本人の感じ方であった。

前述した『野生の思考』のように「人間と自然の本質的関係」を深く掘り下げるよりも、表層で「花や緑」を叫ぶだけだった。それがいまようやく、趣味の園芸から出発して、ガーデニングブームが深まり、ファームリング(土と農)の重要性に気づきはじめた。単なる一本の花や樹木ではなく、巨大人工都市のなかで人間が生きつづけるためには、いかに多様な「生物的自然との永続的なふれあい」が不可欠に気づきはじめた。アル・ゴア著の『不都合な真実』に象徴されるように地球レベルでの政治的課題として環境問題が浮上しているからでもあろう。人工化、高層化、過密化が加速している大都市に生活する実感としても「人と自然のバランス」「人と自然の共生循環」は無視できない。社会全体がやっとそう考

# ライフ

えるようになってきた。

私の研究「住環境に於けるグリーン・ミニмум」(1975年)では、日常生活圏300×300m単位ごとに50%以上の自然面率が必要ということになっている。

緑面のみならず農地のような土面、河川や池など水面のほか、河原など砂利面でもかまわない、その合計が自然面。空気が入って水が浸み込みバクテリアが生きられる自然面率が50%以上でなければならない。これは東京都世田谷区成城の緑に匹敵する数字だが、どんなに都心でも50%以上は必要という考え方である。都心では屋上緑化面、透水性舗装面もカウントしてよいかもしれない。ただし、外気に接していないアトリウムは緑は駄目。ともあれ、緑充足度、雨水浸透、微気象緩和など物心両面からのグリーン・ミニмумが50%である。

## 緑の質 生き物を育む農、オーガニックな緑

グリーン・ミニмум論での緑は、形や種類、土地所有を問わない。樹木でも芝生でも農地でも、公園でもプライベートな個人庭園でも、道路のなかの緑でも河川緑地でもかまわない。全体の自然面量と、それが血管のように地域の隅々まで連続して系(システム)をなすことが大事なのである。

ひとの健康が身体中を血液がめぐり、神経が行き届いていなければいけないのと同じで、どこかにあるから、ここにはなくてよいというものではないのが「人間と自然の関係」の留意点なのである。

このとき最も有効なのが「都市農地」である。いまではモザイク状にしか残存していないが、市街地内にある農地、これはも

う地域の住民にとって大切なお宝である。公園だけでは自然面量が足りないからではない。それもあるが、農地には公園にはない緑の意義がある。土を耕し、種を播くことで「生命を育む」ことができる。無機的で生命の大切さを忘れ、人間同士の連帯もままならなくなっている都会で農業体験ができれば、子ども大人もほんとうに人間らしい生き方を取り戻せる。「憩い」と「癒し」と「人間性の回復」である。

これまでの都市緑化の最大の問題点は、「緑化」という言い方にある。緑に化かす、灰色の都市を緑色にしなければならない。ただひたすらその義務感から「緑の倍増」と称して本数を増やすことだけを考える。「室内緑化・壁面緑化・屋上緑化」と、空いている隙間をただ植物で埋め尽くすことだけを考えた。本来なら、本数を増やす前に、植栽できる土地を増やすべきなのだ。地価が高いということでそれをやめ、既存の公園や道路のままに本数を増やそうとするから、植栽の密度は高くなり、敷化し、もやし状になってしまう。狭い場所に植物を無理やり入れるので、どこもかしこもサツキ、オオムラサキツツジ、アベリアの大刈込となる。

緑化は手段で、目的はランドスケイピング(風景づくり)であることを忘れていない。その土地、その場所にふさわしいプランティングデザイン(樹種選択と配植構成)で美しい風景を現出しなければ意味がない。それなのに、公害に強い、台風に強い、剪定に強いと、メンテナンスする技術者側の論理だけで緑化してきた。これでは、市民の心は癒されない。

大きなビルの足元に、ただツツジ1種だけをベタに植え、ただ整然と刈り込まれ



